

平成 23 年度第 3 回千葉県博物館協議会 議事録

日 時：平成 24 年 3 月 13 日（火）14 時 30 分～16 時 30 分

会 場：千葉県立中央博物館会議室

出席者：委 員—明石要一（議長）、秋田敏彰、鶴澤登美子、大澤雅彦、岡本東三、小野勝弘、
片山喜久子、川崎朋子、栗原裕治、水島陽子、茂木瓊子、吉野博（敬称略）
博物館—美術館長、中央博物館長、現代産業科学館副館長、関宿城博物館長、房総のむら館長
文化財課—文化財課長

〈日 程〉

- 1 開 会
- 2 博物館あいさつ（房総のむら館長）
- 3 文化財課あいさつ（文化財課長）
- 4 議事
(1) 地域振興についての取り組みに関する最終報告書について
(2) 平成 24 年度に予定している主要な事業について
- 5 その他
- 6 閉 会

1 開 会

本日はお忙しいところご出席いただきましてまことにありがとうございます。これより平成 23 年度第 3 回千葉県博物館協議会を開催いたします。私は本日の司会進行をつとめさせていただきます、当館、中央博物館の生態環境研究部長の原と申します。よろしく願いいたします。

では、はじめに博物館を代表いたしまして、県立房総のむらの館長からご挨拶を申し上げます。

2 博物館あいさつ

本日は年度末の非常にお忙しい中、委員の皆様におかれましては、第 3 回の千葉県博物館協議会にご出席を賜りまして、ありがとうございます。

このたびの協議会は昨年 12 月 15 日の第 2 回協議会を受けての第 3 回目となります。現在の千葉県の県立博物館の状況でございますが、県立博物館 8 施設の 2 月末の総入館者数が 104 万 6,019 人でございます。昨年度 3 月末の 97 万 702 名を約 7 万 5,000 人ほど 2 月末現在で越えている状況でございます。東日本大震災という大きな震災が昨年ございましたが、約 1 年を経まして人々の動きが少しずつ活発になってきたということと、各博物館で開催しております企画展示、魅力ある企画展示ということで、利用者が増加しているのではないかととらえております。

本日の協議会でございますが、12 月 15 日の第 2 回協議会におきまして、平成 20 年度から 22 年度の地域振興事業の報告、それと平成 24 年度の利用者目標の設定とその取り組みについてご協議いただいたところでございます。その結果、各博物館の団体入館者の動向調査を実施したほうがよろしいのではないかとということ、それと企画展示のノウハウの蓄積を図って各館で共有するというようなことをして、人材育成の活用を考えるべきであろうと、それと利用者目標達成には県立博物館全体の広報が必要であろうというご意見を賜りました。

本日は地域振興についての取り組みに関する最終報告書、および平成 24 年度に予定している各博物館の主な事業について、この 2 点について、委員の皆様には各分野の専門的なお立場から、忌憚のないご意見、ご助言を賜りたいと考えております。県立博物館のさらなる発展のために、これらの貴重なご意見を活か

していきたくと思います。なにとぞよろしくご指導賜りますよう、お願い申し上げます。

3 文化財課あいさつ

本日はお忙しい中、協議会にご出席いただきましてありがとうございます。東日本大震災からちょうど1年が経ちまして、今年は特別な1年だったように実感しているところでございます。ご承知の通り、房総のむら、大利根分館などが震災の影響を受けました。房総のむらは土蔵等、特殊な工法のところがございまして、早期の修復ということで今年度中に修復できるかなと思ったのですが、無理だということが分かり、来年度にまたがって終了するというかたちになりました。大利根分館や中央博物館本館の復旧工事につきましては終了したところでございます。先ほども豊田館長のほうからございましたが、震災の影響で入館者数が鈍った時期がございました。しかしながら現在、各館の努力によりまして、入館者数を取り戻しておりまして、有料化以降最高だった平成20年の110万人を越える勢いでございます。これはもちろん各館の努力もございまして、特に今年度からちば文化発信プロジェクト事業というのを新たに興しまして、美術館での「山下清展」、現代産業科学館の「かえてきた探査機はやぶさ展」を実施したのですが、いずれも成功したと実感しております。また、そのほかにも地域との連携を意識した中央博物館の恐竜アロサウルス展、夏休みの子どもたちをターゲットにした大利根分館の昆虫展なども入場者の増加に大きく貢献したものと考えております。

次に、現在議会で審議中の平成24年度予算ですが、主な事業についてご紹介させていただきます。まず県立美術館の耐震改修工事の関係ですが、今年度は意匠設計を実施しております。いよいよ来年度から改修工事に着手する予定になっております。現在議会のほうに債務負担を組ませていただく予算案を提出しておりますので、可決されれば実行できる段取りになっております。それから新規事業といたしましては、大多喜城分館の耐震改修工事にかかる事前調査費用を計上することができました。念願だった大多喜城の耐震化がようやく前に進んだと思っております。引き続き本協議会でもいろいろ大多喜城の活性化についてご意見をいただいておりますが、来年度以降の予算要求にはそれらの意見を反映させられるよう頑張っていきたいと思っております。また、先ほど今年度のちば文化発信プロジェクト事業についてご説明しましたが、来年度も引き続き実施できることになりました。来年度は美術館と、ここ中央博物館で実施したいと思っております。のちほど事業内容については説明あるかと思っております。それに合わせまして、小中学校の新入生の保護者の方を対象にした、全県立博物館の無料入場券も配布していきたいと考えております。来年度も本年度同様に、県民の皆様方に喜んでいただけるような特別展を開催するよう準備を進めているところでございますので、よろしく願いいたします。

最後になりますが、今回の会議をもちまして、委員の皆様様の2年の任期が終了いたします。これまでお忙しい中、会議に出席いただき、貴重なご意見やご提言をいただきまことにありがとうございます。4月から委員定数は原則10名以内で、在任期間は10年を超えないとする、という旨を規定した審議会等の設置及び運営等に関する指針により、改めて委員の先生方の委嘱をさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。本日は今期最後の会議となりますが、どうぞよろしく願いいたします。

司会：議事にうつる前に、いくつか確認させていただきます。まず本日の協議会は、協議会として成立しております。なお本日の資料は三部作のものをお配りしております。本日は傍聴希望者の方はいらっしゃいません。ではこれより議事にうつります。博物館協議会運営規則第2条の規定により、会長が議長を務めることになっておりますので、明石議長よろしく願いします。

4 議 事

(1) 地域振興についての取り組みに関する最終報告書について

議長：今日はふたつの議事を用意させていただいた。議事に入る前に、先ほどの話の中で、来館者数が100万人を超えたというのはすごい。自信をもっていい快挙だと思う。文科省の青少年教育機構、青年の家、

少年自然の家が27あるが、利用者数は全部で500万人。それと比べ、5館8施設でここまで来た。それともうひとつ、千葉県には鴨川や手賀の丘等の青少年教育施設が6つほどあるので、あそこの入館者数を調べて、博物館と比較してみてもどうか。数字をうまく使って、多くの人々に知ってもらふ工夫は必要だ。今、千葉県でも教育相談が減っている。この1年間でなぜかみんな内向きで、外に出て行かず、電話相談でも来所相談でも減ってきている。その中で、千葉県の県立博物館の来場者数は増えた。皆さん方の努力があったと思うので、それについては胸を張っていい。

ではさっそく、議事1の地域振興についての取り組みに関する最初の報告案について、学芸普及課長会議の座長、よろしく願いいたします。

座長：平成19年度の博物館協議会における答申に対して、今回この3冊の小冊子にまとめている。一番おもてにあるのが「地域振興事業および学校連携事業の成果と今後の方向性」ということで、これは前回の12月15日に配布した3年分の動向と、今回その前段として、千葉県博物館協議会の諮問答申の経緯が1枚、最初に付いている。それから平成19年度千葉県博物館協議会諮問答申にかかわる我が国の時系列的諸背景、千葉県立博物館としての方向性、という3つにまとめた。さらに前回の協議会の委員からの意見を反映して、過去3年間の利用学校や団体の種別を示した入館状況を追加している。以上の3分冊を、今後の各博物館の内部評価等の資料として利用していく。

議長：説明があったように3分冊があり、ひとつは答申の原形。それで答申の中に、平成21年から23年の3年間の入館者数の内訳が資料としてあがってきている。今までなかった貴重なデータといえる。どこが一番いいお客さんで、どこを改善すべきかなど、これを読むと分かる。最後は各委員の方々からいただいた貴重な意見をまとめている。それでは各館の説明を。

美術館：表をご覧くださいと、学校等の団体がまず一番として地域別の状況があるが、県内あまねく来ているということではなく、千葉市中央区にあるという立地上、千葉地区の団体が非常に多いという傾向が強い。また、葛南、船橋、習志野、浦安、それから君津地区、つまり東京湾岸に沿った利用状況が強い。平成21年度、22年度は隣接する市原市の団体が結構多かったが、今年度は皆無になった。この結果は気になるところで、分析しなければいけない。それからもうひとつの特徴として、地域別の状況でアウトリーチが今年度は非常に増えた。これまで学校は美術館に来づらい状況があり、なかなか伸びなかったが、アウトリーチの形で学習キットを使用した出前授業等が学校の中に定着してきたといえる。学校全体としては少しずつ伸びを示しており、それ以外の、子供会の団体はほとんどない。かわりに地域の文化的な講座で来館する団体が最近少しずつ増えている。学校の種別については、22年度から幼稚園が結構くるようになった。しかも大きな規模の幼稚園が、野外彫刻を中心とした鑑賞教育を行うケースが増えている。小学校は伸びていないが、現在、館としては中学校にターゲットを絞り、中学校の鑑賞教育に利用してもらふことを進めている。昨年度、一昨年度はほぼ同数だったが、それに対して今年度は2倍近く増えている。見学等の利用方法については、美術館の場合は既存のプログラム、鑑賞教室、創作体験、これらを行うところが非常に多く、それ以外、見学のみというのが少ない傾向がある。個別のプログラムというのは、特に事前に相談を行って特別な体験を行う場合を含むが、そういうものも以前と比べて増えてきている。

中央博物館：中央博物館については、本館と大多喜城分館、大利根分館の3館の説明をさせていただく。ほとんど3か年、動向は同じで、平成23年度のデータを見ると分かるように、県内各地から均等に来ている。もちろん千葉市内が一番多いが、特筆すべき点として印旛地区から22団体というのがあり、3年間ずっと二桁を記録している。検証した結果、印旛地区の教員、先生方が、教育研究会や部会の中で、博物館の利活用についていろんな勉強会をやっている。そういったことが非常に推進されている地域であることから、二桁の来館団体数を示していると思われる。また、本館の利用方法について、見学のみが多いが、その他に既存プログラム、それから研究員との連携で独自のプログラムをつくりあげて学習を行うというケースが61団体ある。これは本館のひとつの特徴かと解析している。

次に大多喜城分館については、平成23年度のデータを見ていただくと、やはり地元のいすみ地区からの団体が一番多いという状況が読み取れる。既存のプログラムの学習を行っているという状況もわか

る。

次に大利根分館の3か年の状況について。来館するエリアは、やはり地元の香取地区からが21団体ということで一番多い。ただしアウトリーチが52校あり、下半期は館自体は閉館しているものの、学校団体等の要請があれば、学校のほうに出向いて授業を展開している。特に3～4年生の昔の道具を調べるなど、そういったところでのアウトリーチが非常に多くなっている。

海の博物館：海の博物館は震災の影響が非常に危ぶまれており、実際のところ9月頃までは非常な落ち込みで来ていた。それ以降はかなり持ち直し、学校等の利用も出てきている。地域別の状況を見ると、やはり地元のいすみ地域の利用が多い。アウトリーチでも同じ傾向がある。特徴的なのは東京都の学校団体の利用が多いということ。周辺にある臨海学校を拠点にして、当館を利用するケースが多い。団体の種別については、学校団体が一番多く、子供会や公民館等を足した以上で、ほとんどを占めている。学校団体の種別では、小学校が一番多い。続いて高等学校や大学、中学校等がある。今後はこちらのほうへも狙いを絞った広報が必要かもしれない。利用の方法については、見学のみ、既存プログラム、個別プログラムとあるが、見学のみの中には、ただ自由に見学するだけでなく、我々が案内してバックヤードを見学するメニューがあって、これはかなり人気がある。これを含めた数字と考えていただきたい。個別プログラムは先方との協議で行うが、内容的にはほとんど博物館の前に広がる海、この磯を使った観察が主体となっている。学校等がどんどん増えてきており、敷居を低くして子供たちが楽しめているのかと思っている。

現代産業科学館：当館は市川市に所在するため、葛南地区の学校団体の利用が非常に多い。東京都の利用者もかなり多い。東京は距離が近いということもあるが、企画展やイベントの際には、江戸川区や葛飾区の学校を中心に集中的にチラシを撒いているので、その成果だと考えている。県南地区からの利用者が少ないのではないかと、様々な委員会で指摘されてきたが、今年度は若干ではあるものの、鴨川地区2、安房地区2と数字があがっている。今年度から鴨川方面へ館長を筆頭に何人かで出かけて出張講座を実施しているため、その成果が少しずつあらわれてきたのではないかと思う。利用方法については、当館の場合、既存プログラムに入れている工作教室というものがある。これは工作教室のメニューを20ほど用意し、学校側でそこからチョイスしてもらったプログラムである。どちらかといえば個別プログラムに近い内容ともいえるが、こういった利用が今増えている。

関宿城博物館：地域別の利用については、やはり地元の東葛地区が一番多い。野田、流山、柏からコンスタントに来ている。それ以外の地域に関しては、観光地という側面から様々な施設を回る中のひとつとして当館に立ち寄る団体を中心となっている。次に多いところが埼玉県、茨城県だが、多少減少しているような傾向も見られる。行政が違うため、一度来たところには積極的に声をかけていかなかった、来てくれるのを待っていたという反省点もある。アウトリーチに関しても同じ傾向があるので、これからももう少し働きを強化していきたい。

房総のむら：学校等の利用団体数については、やはり23年度は随分増えている。これは昔の道具と暮らしという単元が、3年生と4年生のどちらでやってもいいというのがこの年度にあたったため、前半は4年生、後半は3年生が多く利用したので底上げ状態になった。来年度は3年生だけになる可能性が非常に高いので、若干減るかもしれない。利用地区としては、葛南、東葛、印旛、山武、君津、東京都、それから茨城県についてはコンスタントに増えている。少ないのは銚子地区と県南地区で、このあたりはもっとプッシュしなくてはならないと考えている。千葉・茨城の県境まで2キロ程度という立地から、ベースとして茨城県がよく来てくれている。種別としてはやはり学校の利用が最も多い。団体の種別としてはやはり小学校の利用、3～4年生が中心。利用方法については、当館は体験型を売りにする博物館なので、見学のみと、既存プログラムの実施がほぼ五分五分となっている。見学の方が若干多いということで、もう少し団体向けの体験プログラムに力を入れたい。最近では学校の規模が小さくなっており、お小遣いを持たせて、子供たちを「房総の町並」に放つケースがある。自分たちで何を体験するか決め、そこでお金を使うパターンの利用が増えている。来年度は3年生の利用が多くなると見込んでいるので、そういったケースに対応できるようにしたい。というのも、今のところ3年生以下は引率者が必要とい

うことになっている。個々の体験に引率者がつくというのを取り払い、3年生でも単独でできる体験を盛り込んで、利用をより高めていきたい。

議長：以上、各館の3年間の団体利用者数の動向について説明していただいた。どの館も今年度はよく増えていることがうかがえるが、各委員の方々でご質問、ご意見は。

委員：見学した子供たちの感想は、どういう形で回収しているのか。

房総のむら：私どもの方は、子供たちが自由に書けるアンケートを毎日回収している。もうひとつは学校団体が各学級単位で感想文を送ってくる。引率の先生方も感想を一緒に送ってきます。美辞麗句が並んでいるわけではなく、自分たちが利用した際の感想、準備期間を含めてどうだったのかというような感想が書いてあるので、それを集約して活かしている。例えばこういう体験が難しかったというのであれば、そこに対してどういう改善点を加えていけば小さい子供でもできるのかとか、そういった形でフィードバックしている。

委員：各館の改善の参考になるようなアフターフォローというか、参加した人の感想は、いいにつけ悪いにつけ、次の改善の参考になると思うが、それは各館似たような実情で取り組んでいるのか。

中央博物館：中央博物館では、アンケートだけでなく、各学校が来館した時に教育普及課の職員が、生徒や先生を対象にしたレポートをまとめる。子供たちがどういうものに関心を持っているのか、どういう学習をしているか、または先生方がどういうふう感じたか、というのを全部レポートにして、1枚にまとめたものを館内の会議で共有している。生の声を研究員で共有し、それからの事業展開に反映している。

美術館：美術館では特にアンケート形式の調査をしていない。ただ、既存のプログラム、鑑賞学習等を利用する学校が非常に多いため、ほとんどの場合、感想文という形で後日学校から送られてくる。その中には改善すべき点もあり、参考にしている。

現代産業科学館：当館も学校から感想文が送られてくるパターンが一番多い。また、既存プログラムの一部については、子供たちと対話する時間を設けており、例えば工作の前と後の感想を聞いている。それらをまとめて次のプログラムの改善につなげている。

関宿城博物館：団体の規模によっていろいろやり方が違うが、例えば150人くらい、大型バスで来た場合は、職員が3人で対応する。3人しかいないが、できるだけ誠意をもって対応している。館内が狭いので交通整理をしたり、そういった苦労が多い。一生懸命やればそれだけ先生の方から後でお礼や改善点について報告がある。そういったことで少しずつ改善している。

議長：ただ、学校を通した感想文はあまり信用できないのではないかと。「よかったです」と。それも大事だが、それ以外に匿名での注文や苦情をどういう形で残しているか。例えば通信教育のベネッセが伸びてきた背景には、苦情を徹底的に集めるという取り組みがあった。苦情があった問題をいつまでに改善するのか、1年かかるのか、半年かかるのか、ひと月かかるのか、1週間か、1日で直せるか、きめ細かく分けて対応したから1000億円規模の会社に成長した。やはり苦情を潰していく仕組みづくりをやっただくといいと思う。利用者が増えれば増えてくるほど、対応が難しくなっていく。利用者が少ない場合は手厚いサービスができるが、利用者が増えると苦情も増えてくるはず。それをいかに直していくかという仕組みづくりをやっただくと、もっとよくなるを感じる。

委員：関宿城博物館は辺境にあり、茨城県、埼玉県からの利用はあるが、東京都からの団体利用が少ないのではないかと。何か特別なPRはやっていないのか。

関宿城博物館：職員が県を越えてチラシを持っていっている。最近は埼玉、茨城ではなく、栃木まで足を運ぶこともある。旧下総の国の地縁を有効に使っている。

議長：各委員の意見は、館長が代わっても次に継承できるように残していただきたい。

(2) 平成24年度に予定している主要な事業について

議長：議事の2番目、平成24年度に予定している主要な事業について、各館から報告を。まずは県立美術館

から。

美術館：ちば文化発信事業として、特別展「魔法の美術館 光のアート展」を7月14日から9月2日までの44日間開催する。夏休みの間に小中学生に是非見に来てもらおうと期間を設定している。いわゆるメディア・アートと呼ばれるジャンルで、コンピュータを使用した展覧会になる。今回は作家13名、17作品を予定している。メディア・アートは、ただ作品を鑑賞するだけでなく、実際に作品を見て触って、鑑賞する側がある操作をすれば、コンピュータがそれに反応して返してくれるという仕掛けをした作品もある。世代を越えて楽しんでいただきたい。

また、11月17日から12月27日まで、企画展として「増村益城展」を行う。増村益城は熊本県出身の漆作家だが、晩年の十数年を本家の柏市で過ごしている。増村は「きゅう漆」という、いわゆる漆の塗りの技術で作品を完成させる。この技法の保持者として人間国宝にもなった。この展覧会は25年ほど前に熊本県立美術館で実施され、15年ほど前にも東京国立近代美術館でとりあげられた。増村益城のご長男の紀一郎氏は、同じくきゅう漆の人間国宝で、現在埼玉にいらっしゃるが、こうした関係者の方々にご協力いただいて準備を進めている。

それともうひとつ、普及のほうの展覧会をご案内さしあげる。今年度、美浜区を中心とした地域連携プロジェクトがあったが、来年度はそれに加えて成田市の地域連携アートプロジェクトを実施する。

「成田アート博覧会」という名称で、成田の参道を仲町商店街と、成田市立成田中学校、成田市教育委員会、そして県立美術館が連携して、成田の「過去・現在・未来」をテーマに博覧会を行う。「過去」については錦絵や名所図絵等の展示、「現在」については中学生が描いた成田山の風景画、そして「未来」についてはやはり中学生が未来を想像してつくった作品を展示する。全面的に成田市の各団体の協力を得て実施する予定となっている。

中央博物館：本館では、企画展「シカとカモシカ」を夏に予定している。期間は7月7日から9月17日。これは私どもの職員の長年の研究成果に基づく、中央博物館のオリジナル性の高い展示であると自負している。また、特別展として「ティラノサウルス～肉食恐竜の世界」を10月20日から12月24日に予定している。これは先ほど文化財課長のほうからも説明があったちば文化発信プロジェクト事業ということで、今年度は美術館の「山下清展」、それから現代産業科学館の「はやぶさ展」とあったが、来年度は美術館の「魔法の美術館 光のアート展」、それと私どもの「ティラノサウルス～肉食恐竜の世界」ということで予算をつけていただいた。中央博物館としては初めての事業になる。その他、季節展6企画、生態園トピックス展4企画等がある。

大利根分館では企画展「水郷を旅する人々Ⅱ」を予定している。その他、収蔵資料展が2企画と写真展がある。

大多喜城分館では企画展として「上総の仏教美術」の他、収蔵資料展等4企画を予定している。

教育普及事業については、お配りしている予定表に月ごとの行事が出ているが、講座を74件、観察会を30件予定している。それからイベント、私どもでは研究職員が展示室に出て、土曜、日曜、祝日に午前1回午後1回、30分程度、展示室で専門的な話も交えながらお客さんに話すミュージアムトークというのを全体で113件行う。大利根分館では、講座・体験等22件、川のフィールドミュージアム5回、大多喜城分館では講座・体験等13件を予定している。

それから、来年度については、文化庁の芸術振興費補助金ミュージアム活性化支援事業というのがあり、これに対して「博物館収蔵資料を次世代へ引き継ぐシステム構築-地域の自然・歴史・文化資産を中心に-」「社寺林を中心とした植物情報記録と地域の魅力発信事業」「博学連携を促進する展示手法の検討-学校教育で活用できる博物館展示のあり方-」の3件を応募している。まだ予算がつくかどうかは聞いていないが、予算がいただければ、この3事業を進める予定でいる。そのほか研究事業として、各研究員がテーマとしている研究や、重点研究事業としての課題をやることになっている。

海の博物館：海の博物館では、年間行事として展覧会や展示事業、普及事業、観察会、講座、フィールドトリップ、バックヤードツアー、タッチプール等を予定している。このうち平成24年度の主な行事について、展示事業2つをご案内させていただく。

まずひとつは、マリンサイエンスギャラリー「深い海に暮らす生きものたち」。これは当館で特別展に相当する企画展示になる。2月16日から5月6日まで、およそ80日間をかけて行う。特別の展示室がないため、普段は研修室として使っている150平米程度の部屋を使って開催する。私どもは平成22年度から24年度にかけて、房総半島の深海生物を駿河湾との比較という観点で研究しているが、最終年の平成24年度末に、これまでの成果を県民に公開する場として、この展覧会を位置づけている。

もうひとつの展示事業として、収蔵資料展・夏休みスペシャル「海のカニ・川のカニ」を、7月14日から9月2日、いわゆる夏休み期間中に開催する。この期間中は休館日なしで、通して51日間行う。場所はマリンサイエンスギャラリーを行った研修室、このうちの約60平米を使って行う予定でいる。開館以来、千葉県を中心に海や川に住むカニの標本や画像を集めてきたが、この展覧会は子供を主な対象として、千葉県の海や川に暮らすカニについて楽しく学べるような展示にしたい。川のカニ、河口のカニ、磯のカニ、海の沖のカニ、深海のカニ、珍しいカニ、そういったものを考えて展覧会を計画している。

現代産業科学館：現代産業科学館の主要事業は2つ。まず8月11日から22日まで、夏休み期間中に「宇宙へのきぼう展」を12日間開催する。サイエンスドームを利用して、プラネタリウムを上映する。それにあわせて宇宙関連の企画展をやるという、そういう意味合いもある。国際宇宙ステーションや日本実験棟「きぼう」での宇宙飛行士の研究内容、宇宙メダカ、宇宙エレベーター、それから一時期行方不明になっていた金星探査機の「あかつき」が最近またどこを回っているかということが分かり、うまくすれば「はやぶさ」のように復活するかもしれないとか、そのような展示内容を予定している。

もうひとつの企画展は、10月20日から12月9日まで44日間開催する「エネルギーの未来展(仮称)」。いろいろ研究が進められている新しい発電方法で、なるべくいろんなところで扱っていないようなものを提示したい。バイオマスとか燃料電池、小規模の水力、エネルギー源としてのメタンハイドレード、そういうものがいま掘削の準備にかかっているとか。房総半島にも固有の地下資源として天然ガス等の特徴的なものがあるので、そういうものについても紹介したい。

関宿城博物館：常設展示以外に10の展示を計画している。企画展は常設展の中からテーマを選び、掘り下げた展示をしているが、来年度は「醤油を運んだ川の道」を予定している。千葉県は醤油生産全国一位であり、醤油によって江戸と千葉県を結んで下総の国が発展し、水運が衰えても醤油産業は残ったと。そういった展示を実施する。また、3階の多目的展示室では、「関宿城百景写真展」「昔の暮らし展」「版画展」など6事業を行い、エントランスホールでは、「写生コンクール作品展」のほか、正月に7尺の凧を展示する。

教育・普及事業は、郷土の歴史に関する古文書を読む講座や、郷土食を再現する講座など48事業が予定されている。スーパー堤防上の広い面を使った「関宿城まつり」など、地域住民と協力して開催するイベントもある。

房総のむら：当館は展示や実演を見るだけでなく、体験することによって伝統的な技術や生活様式を学ぶことができる。敷地が51ヘクタールあって、丸1日でも2日でもかけて体験していただきたいが、お配りした資料には時間が短い方のためのモデルコースも紹介されている。団体の体験は簡単なものだけでなく、達人講座もある。長いものでは1年間、毎週日曜日に通って、丸い青竹からカゴが編めるようになる、そういうプログラムもある。それから農家、武家屋敷、商家の体験、あるいは風土記の考古学関係の体験がある。

来年度の主な行事については、まず4月7～8日に「さくら祭り」がある。去年は震災の関係で中止したが、今年は実施する。それから5月3～5日の「春のまつり」、8月11～12日には20時まで開館時間を延長する「むらの縁日・夕涼み」、9月22～23日は収穫を祝う「稲穂まつり」、11月3日は「ふるさとまつり」をそれぞれ開催する。11月23日は、昨年私どもが25周年を迎えて25周年記念感謝祭を行ったが、来年度も地域感謝デーということで、千葉県在勤在住の方には無料で入っていただけることにした。直営の館ではなかなかできないことだと思う。それから正月2～3日も「むらのお正月」として開館する。

展示については、メインは10月6日～11月25日に開催する企画展「むらの自然」（仮称）で、豊かな林に囲まれた当館の自然を紹介するとともに、体験演目や生活歳時記などの展示に見られる「自然とのつながり」も併せて紹介する。トピックス展の「梵天ってなんだろう」は、中央博で行った梵天の出羽三山信仰の梵天について、またうちのほうでもやろうというもの。

このほか、定番で人気のある落語会やフルートの演奏会、企画展示に関連した歴史の里の音楽会、各講座を今年度同様に実施していく。

議長：以上、各施設から24年度の主な企画展示に関するご説明をいただいた。これに関して委員の方々からご質問、ご意見をいただきたい。まず私の方から、美術館の「成田アート博覧会」は非常に興味深い事業だが、これから100年後の成田を広く考えていただけないか。例えば成田には空港があってホテルがたくさんあるが、ホテルがいろんな絵画を所蔵しているかもしれない。各ホテルの玄関に立派な美術品があるのではないか。それらを紹介してみてもどうか。あるいは新勝寺には宝物がたくさんあるのではないか。手元の資料では、連携団体に新勝寺が入っていない。つまり言いたいのは、成田ならではの存在である新勝寺や国際空港をうまく活かしてほしい。そして次に、英語と中国語とハンガルの案内図を作ってみてはどうか。そういう配慮まですると成田で開催する意味が強まる。

美術館：案内図はつくる予定になっている。文化庁の補助金を申請しており、それが採決されればそれなりのことはできると思うが、ホテルの話は考えていなかったので検討したい。

議長：日本系と外資系があるので、所蔵品にも特徴があるかもしれない。

委員：千葉県の美術館の特徴として、考古系の研究者が美術館の中にいる。そういう意味では、この企画は新しい美術館のあり方のようなものが出てくる可能性がある。成田にとどまらず、いろんなところの連携があって、新しいアートのあり方、提案の仕方ができるのではないか。

美術館：この事業は文化庁の予算をいただくつもりであり、観光振興という側面でたしかに新しいやり方がでてくると思う。今年度、その前と美浜アートフェスティバルをやってきたが、きっかけをつくり始めたばかりで、今の段階ではまだ点でしかない。そういう意味では千葉県全体の面という形に広がってほしい。

委員：成田山の霊光館も、成田の古地図など古い資料をたくさん展示している。展示しているのはごく一部ではないか。ああいう貴重な資料を、こうした機会に見られるようにしていただけるといい。交渉しない手はないだろう。

美術館：実行委員会をこれから立ち上げるので、柔軟な形で検討したい。

委員：成田のほかにも、中山の法華経寺とか。お寺さん自身が展示をやらないときに、こういう機会に見せていただけるといい。

議長：ほかに何か。

委員：現代産業科学館の「宇宙へのきぼう展」は大変面白そうな企画だが、夏休みの企画なのになぜ開催期間が12日だけなのか。大掛かりで実施する割にもったいないのではないか。

現代産業科学館：予算的な条件がある。プラネタリウムを開催するのに500万円以上かかる。全体的に予算が限られており、その期間内でないとプラネタリウムができないということで、12日間になった。

委員：予算の話が出たが、今、房総のむらのしおりを拝見したが、後ろのほうに宣伝がたくさん載っている。これは民間から広告料をいただいてやっているのか。

房総のむら：ここに書いてある企業等については、いわゆる協賛金という形でお金をいただいている。広告のデザイン、レイアウトについては、私どもが協賛者と打ち合わせをしながら決め、印刷会社に発注している。

委員：これは非常にいいと思う。他館でもできないのか。

房総のむら：ただ私どもの館は指定管理者制度のもとでやっており、他の県立館では非常に難しいと思う。

委員：市役所の封筒に宣伝を入れているケースもある。そういった方法がもし可能であれば、検討してはどうか。

議長：できるのではないか。課長が見えているが、いかがだろう。

文化財課：県立でやるには縛りが多い。房総のむらは教育振興財団が指定管理を受けているので、そういう柔軟な対応ができる。ただ、県としても、例えば職員録や教育要覧の裏に広告を載せることができるような体制になってきている。各館で何かの冊子の裏に広告を載せるようなことは、可能ではないかと考えている。

委員：細かい話だが積み重ねは大切。そういったところから取り組んでほしい。

委員：ちなみに1ページの広告料はどれくらい？

房総のむら：1ページあたり協賛金5万円をいただいている。

委員：どこまでお答えいただけるか分からないが、事業計画には普通、それに伴う予算の話がある。それぞれの予算規模はあまり表にはできないのか。計画によってお金のかかり具合も随分違う。どの程度の事業費があつてこういうことを企画されているのか。

文化財課：予算については議会にかけており、これだけ欲しいということをやっているので、発表することは別に問題ない。あとは議会の承認がいただければ、それがつく。今の段階でこの事業はいくらくらいと先生方にお答えすることはできる。

委員：館ごとの事業別の予算規模は？

美術館：特別企画展の「魔法の美術館 光のアート展」は1700万円。これは一般の枠と違い、特別枠でつけていただいている。「増村益城展」は560万円。「成田アート博覧会」は317万円で申請している。

現代産業科学館：「宇宙へのきぼう展」は580万円ほど。「エネルギーの未来展」は290万円ほど。ちなみに今年度の「はやぶさ展」は特別に1950万円ほどいただいたおかげで、いろいろな展開が可能になった。

関宿城博物館：当館は大きく分けて展示事業、教育・普及事業、調査・研究事業の3本がある。展示事業については約230万円で、他館の一展示事業よりも少ない。企画展については170万円確保してある。これらは日本財団に申請している。これがないと私どもの企画展は非常に厳しい。常設展以外に10の展示を予定しているが、これは館の中でのやりくり。多目的展示室を有効に使っている。お金はかけられないが、うちの学芸員の力量を上げるという大きな目的がある。学芸員が経験してきたノウハウを活かし、工夫に工夫を重ねてやっている。また、当館の収蔵品のほか、地元の方々から作品を借りてくるなど、コラボレーションする形でやっている。教育・普及事業は76万円だが、約50万でやりくりしている。調査・研究事業は17万円。小規模館として、職員みんなで一丸となってやっている。

中央博物館：中央博では「シカとカモシカ展」が約370万円。「ティラノサウルス」が1700万円。そのほかの普及事業として、本館分だけで4000万円ほどある。次に大利根分館は、企画展「水郷を旅する人々Ⅱ」を含めて展示が約90万円。大多喜城分館は企画展が約220万円。海の分館は展示、普及事業あわせて約550万円の予算となっている。

委員：去年の「はやぶさ展」や「山下清展」で、ちば文化発信プロジェクトは大成功を収めたと思う。その予算をどんと増やすわけにはいかないのか。来年度は間に合わないが、再来年度くらいから、成果を踏まえて大倍増をお願いするわけにはいかないものか。

文化財課：ちば文化発信プロジェクトは昨年度から始めて、美術館と現代産業科学館にお願いして大変好評をいただいた。入場料をかなりいただけたので、それをもって財政のほうには折衝してきている。予算を増やすことについては理由の説明が必ず求められるので、なかなか厳しいところがあるが、24年度も同額程度でやらせていただき、多くの県民に喜んでいただけるようなら、それをもとに財政のほうにも折衝していきたい。

委員：先ほど関宿城のほうでお金がないという話があつたが、そのぶん学芸員の力量が上がるということで、苦勞されたと思うが、館や学芸員の方にとっていい側面もある。そういった苦勞も含めて展示でアピールする取り組みもいいのではないかと。

関宿城博物館：おかげさまで東葛地方のミニコミ紙や大新聞に、年間400件ほど掲載していただいている。その関係で地元の方々結構来られている。

委員：もうひとつ。関宿城博物館には行ったことがなく申し訳ないが、電車で行ってまたさらにバスに乗る

と聞いている。循環のバスとか、ミニバスの手配とか、アクセス面での取り組みはあるのか？

関宿城博物館：野田市に「まめバス」という市内循環のバスが1日に10便ほどある。ただ、利用客が少ないため、今年度から土日が廃止になった。私どもは存続をお願いしたが、いかんせん実績を出されると難しい。

委員：提案を3つ。ひとつは、「はやぶさ展」や「山下清展」で黒字になった部分をフィードバックするという話があったが、それを基金として貯蓄するような形ができないものか。ちば文化発信プロジェクトといっても、一度決まった予算額が大幅に増えることはない。大きな企画は今、何千万円単位である。何百万円という単位でこじんまりできるかもしれないが、大きな企画をやって黒字になった部分は県民に返すべきだと思う。基金みたいなものを作って、毎年の予算にプラスアルファして大きな企画を開催し、県民に返すということができないかと。

2つめは地域振興について。条例を改正しないと割引できないとなれば、こんな案はどうか。例えば大多喜城分館と海の博物館、入場券は一枚でその当日券を持って行けば、片一方は無料で入れる。1施設だけ行ってもいいし2施設とも行ってもいい。あの地域で自然以外の観光となると、こういう博物館は目玉になる。地域に割安感があれば行く。そういうことで地域の振興にも役立つのではないかと。

3つめは学校連携。近くからくる場合は「館」だけでいいが、遠くからくる場合は館だけでは割にあわない。遠くからくる人はいろんな所を見たい。神奈川県为学校向け団体利用ガイドでは、遠足コースなどを提示している。そういうものを各館が持っていて、この館に行けば前後にこれとこれを見て、一度の訪問で回って行ける。そんな案内を出していくといいのではないかと。特に中央博物館は高速道路が近く、遠くから来た場合も様々なコース提案ができる。

議長：具体的な提案、ありがとうございます。まず基金がどこまで可能か検討していただきたい。それと1枚のチケットで2施設に行ける仕組み。3つめの提案について、私からもひと言。横浜市の小学6年生の修学旅行は必ず日光に行くが、日光だけではなく群馬県の農村にも宿泊し、農業体験をする。これが非常に評判がいい。日光の印象よりも農家に民泊するほうがインパクトが強い。そういうストーリー性があるといい。

委員：収入を得る方法について、県の条例の問題もあるが、どこまで可能かギリギリまで詰める必要があるのではないかと。現代産業科学館の場合は、開館の時から民間企業や学校が入って運営協力をやっている。館が企画したものについて協力するという形でやってきた。それが何年前か前に、企画展のブースに企業の名前を入れさせてほしいという運動があって、その結果、社名の入ったパンフレットも渡せるようになった。そこまでが今の条例の限界かと思うが、パンフレットや封筒やハガキの下に企業名を入れていけば、より立派な宇宙展を行う原資が稼げるのではないかと。もう一步、収入に結びつくような方向で、行政に検討していただければ。

議長：文科省もやっているから、県もできると思う。上野にある科学博物館、あそこは1日、東芝にお貸ししたことがある。創立の何十周年かでお貸しして、お金をいただいた。中央博物館もどこかに1日貸してみるとか。

委員：町づくりの視点から博物館を見てみると、ひとつは持続発展させていかなければいけない、途中で停滞させるわけにはいかないということになると、やはりそれなりの品格と、ゆとりと、誇りを持っていないとできない。町づくりでも永続している町というのは、誇りがあってゆとりがあって、品格があることが条件。そういう意味では博物館もその3つを、県民も知事も含めて、行政も博物館の職員も共有しないと。もうひとつはこれまでの町づくりは日本が高度成長の時代だったから、行政と専門家が計画を描いて、それを実行すればよかった。言ってみれば県民は常にサービスの受け手であり、教わる側であり、お客さんであるという時代だった。ところが、私も13年くらい非営利組織をやっているが、非営利事業がようやく日本でも定着してきたように感じる。例えばバスの運行で営利企業と組もうとしたら、それは金儲けにならなければやってくれない。しかし非営利組織であれば、買い物難民のためにコミュニティバスを出しているケースもある。関宿城のように不便なところは、もう少し行政の縦割りを排して、横でつながり、非営利事業をみんなでやっていくといいのではないかと。地域というものは、博

博物館も地元の住民も共に育つのだという意識がなければだめで、博物館も育つ、研究者も育つ、住民も育つというような、そういう関係を紡いでいかなければならない。財政はこれからますます厳しくなっていくわけだから。そういうようなことを考えて、もう一度新しいマーケティング、要するにこれまでのマーケティングは単なるお客さんを対象としていたが、そうではなくサポートしてくれる人もマーケティングする意識が必要になってくる。そのためにも、博物館の品格とゆとりと誇りは絶対必要である。自分たちの博物館を県民も守りたい、博物館も県民と一緒に育つ、そういう意識が常に必要なのだと思う。そうするとやはり情報を開き、いろんな形でもっと大きな議論をしていくことが必要になる。

協議会でも、毎年予算が厳しいという話があり、代々の人に聞いてもやはり無い袖は振れないということであった。今の多くの博物館協議会は館長の諮問機関ではあるが、予算獲得交渉をする側で同時に、決まった予算を執行する側、例えば文化財課が実際には協議会を主導しているように私には見えた。博物館は、機構的には教育委員会所管機関になっているのだから、例えば博物館協議会は教育長の諮問機関とし、協議会委員は教育長に答申するとするようになれば、予算についてもそこで協議できるようになる。ただし、基本的には精一杯努力しても、予算獲得には仕組み上の限界があり、たとえば条例改正など、そういう仕組みも必要なら変えていくというところまで議論を進めていかないと、なかなかこの閉塞感を打開することはできない。

委員：関宿城について独自のイベントはどうかとコメントしたが、やはり限られた予算でということになると、ほかの団体とのタイアップをしてやらないと難しい。ほかの館は集客のある企画展ができて、小さいところでは予算が回らず独自の企画展ができないというのが、同じ博物館ながらどうかというのを感じる。できれば予算が黒字になった時に、その予算を次の年度で回してあげて、いい企画展ができるような予算づけをしてあげるとか、出っ張ったところを凹んだところに持って行くようなことができないものか。毎年の予算について、前年比でこれくらいという決め方では、ずっとその予算の中で四苦八苦しなげながらやらなくてはいけない。海の博物館も四苦八苦ししているのを感じたが、それでも中央博物館の分館として守られている部分はある。関宿城については配慮があっているのではないかと。

関宿城博物館：タイアップという点についてはたしかにその通りで、当館は様々な団体と組ませていただいてイベントを行っている。あるいは関宿城まつりのように、私どもの館から予算が出るわけではないが、事業に参加することもある。このまつりでは、実行委員会の一員として、当館が古武道を担当している。来年度の関宿城さくらまつりについては、駐車場を確保するなどいろいろな対応している。また、今度は野田市のコウノトリ放鳥計画に合わせてコウノトリの凧をつくらうと、職員たちも頑張っている。自分たちも作る、参加していくということをやっている。

委員：自分の住んでいる地域が近いから臍頂で言うわけではないが、関宿城は非常に頑張っている。まわりを見ると2階の家に船が付いているところがあり、あの地域が水に浸かるというのを表して非常に印象深かった。当地にはスーパー堤防もある。3.11以降の1年を過ごし、今のように防災の意識が高い時に防災関連のイベントもしていただけると、皆さん興味を持つのではないかと。

関宿城博物館：友の会の中に国交省の職員がおり、祭りの時などに液化化現象を実験してみせるという話も進んでいる。いろいろ考えている。

議長：時間が迫ってきたのでこのあたりで終わりにしたいが、私の方から2つお願いしたい。ひとつは、来年度の主要計画について合同で記者会見を開いて欲しい。県立博物館は何をやっているのか、どういうメニューがあるかということを若い記者は知らない。そこで4月のいい時に記者会見を行って、こういうのを1年間やりますよと伝えて欲しい。彼らもメモをするはずだから、また個別の期日が近づいた時にPRすればいい。これはお金がかからない。

2つめは東京大学が秋入学を考えている。あそこは定員が3000ちょっとあるが、それが半年間ギャップタームとって何をしていいかわからない。中間報告を読むと東京大学は体験推進機構をつくっている。千葉は近いのだから、博物館の中で彼らを受け入れるメニューを用意できないか。例えば今日、房総のむらの体験プログラムの報告があったが、小中学生用もいいけれど、大学生用の体験メニューという視点でもう一度企画を練ってみてはどうか。東大もアドバルーンをあげてみたものの、半年間何を

させていか困っているはず。千葉の県立博物館がメニューをたくさん用意しておけば、3000 人の学生のどこかに需要はあるのではないか。海外に行ってもいいが、千葉なら近場で日常的に通えるメリットがある。それを視野に入れてもう一度整理して提案してみてもどうかと思う。

以上をもって3回目の千葉県博物館協議会を終わります。今日はありがとうございました。